



# 愛知県知多郡上野町名和 八幡社貝塚発掘調査報告

日本考古学協会々員  
発掘担当者 吉田 富夫  
発掘責任者 上野町教育委員会

## 位置・現況

標高10mの台地縁が、名和集落の東方において、東方名古屋市緑区大高町地内から、南方本町加家方面に向かって屈折する個所に当たり、やや大きい谷を南東から北西に向かって開く北側の台地縁の突端に近くこの八幡社が位置する。台地は第3紀礫より成り、背後は標高30mを越える緩やかな斜面の台地となっている。前面の谷は沖積低地で、台地縁との比高-2.24m、発掘当時まだ従来の水田であったが、2箇月を闊した今日すでに全く埋立てられて、台地縁と余り高さの変らぬ住宅用地となってしまった。

神社境内は概ね扇状に後方狭く高く、前方広く低い地形に成り、ことにその前半の地域にハイガイが散布し、一部密集して貝層の存在を示している。

## 遺跡の発掘

昭和42年4月8日、町教育長・町議会副議長・町役場吏員・上野中学校職員生徒・名古屋市在住の愛知学院大学歴史クラブ員等参加

して、神社境内の北西隅に2m×1.5m、やや離れて中央寄りに豎に長く5m×1.5mのトレンチを入れた。

前者は古瓦を多く出すと思われ、後者は良好と思われた貝層を検するためであり、後者を第1トレンチ、前者を第2トレンチと名づけた。

ところが発掘が進むに従い結果は意外で、貝殻は表土中にもみ見られ、一部20cmほどの厚さに層を成して堆積している部分もあったけれども、むしろそれは一局部に止まり、全体としてはかえって地下に貝層を認めることはできなかった。

さてその地表下は概ね20cmの厚さで灰色の泥礫土層が広がっており、その層のところどころの凹部に、ハイガイが層を成して堆積しているにすぎない。社殿寄りの斜面の高い方では、その下に厚さ10cmほどの淡黄色砂質土層が認められたが、斜面の低い方にはそれがなく、直接地盤である砂質赤色と白色粘土との混土層に接していた。

遺物はその灰色泥礫土層から出土し、貝層からも黄砂層からも見出すことなく、もちろん層の上下によって性質が変化するほどの厚みではないにもかかわらず、おそくとも弥生中期以降鎌倉ごろまでのものが雑然として含まれ、知多郡によく見られる様相を示していた。

貝層を形成するのは前述の通りよく成熟していたハイガイであるがごくわずかにアカニシ・カキ等をも発見した。縄文早前期の貝塚がハイガイを主とすると言っても、もう少し他の種類のものをも混

じているのに、余りにもハイガイのみということも、またアカニシの殻を割っていないこともこれら古い貝塚とは異り、かえって中近世の所産であることを思わせる次第であった。

### 遺物

**縄文土器** 小破片のため確実に同定できないが、多分縄文土器と思われるものが少数ある。黒色で手作りの直口の破片や、条痕ある破片など写真に示したのはその代表的なものであるが、あるいは弥生式かもしれない。今しばらく縄文に所属させておくこととする。

**弥生土器** 櫛描きの並行直線文の中に豎位の線を入れているものは、典型的な尾張の弥生中期の壺で、焼成黒色なものにふさわしい。前述の条痕土器がもし弥生式ならば、やはり中期に属する。その余はすべて後期のものばかりで台付甕・壺・高杯・器台・無頸壺などばかりで、いずれも通例のものにすぎない。

**石鏃** 予備調査の際の表面採集にかかるもの1個で、長三角形をなし、わたくりは甚しくない。おそらく弥生中期を降らないものであろう。

**土師器** 土師器としての特徴を明示する器形の破片はないが、おそらく弥生式との間に区別がつけ難く、土師器として存在するものもあることは当然考えられてよい。

**須恵器** 破片が小さいので須恵質と知られるばかりで、器形について知ることはできない。量は少ない。

**陶質椀** 鎌倉時代の口辺萎縮して直線的なもの。少量。

瓦 平瓦ばかりで瓦当を見出さないが、厚さに2cm乃至1.3cm  
くらいの種類があり、片面に縄目痕あるものが厚く、格子文のある  
ものが一般にやや薄目である。格子文あるものの中では、端部だけ  
に押捺しているものが見られる。しかし他面の布目痕は前者が粗く  
1cmに7~8条の糸を通してのり、後者は逆に1cmに9~14条  
ほどを通してのり。

焼成は薄手・斜格子文・布目1cmに14条のものが青灰色で著しく  
堅緻であるほかは黒~黄各種の色相を呈するけれど、概して軟かく  
洗えば溶けるものさえ見られる状態である。平安乃至鎌倉時代と言  
えるのではあるまいか。

内耳鍋 内耳の部分が肥厚していて割れ難く、その部分を中心  
にした破片が1個ある。

### 考 察

本遺跡は貝塚というよりは、むしろ貝塚と呼ばない方が正しいで  
あろう。おそらく貝層で蔽われていた時期もあったことであろうが  
、それは中近世のことで、しかもこの地方によく見られ遺物を含ま  
ないものであったと考えてよい。それも一種の遺跡でないとは言え  
ないけれど、遺物を出すという点に重点を置けば、むしろ貝層下の  
土層が問題となる部分なのであるから、貝塚と呼ぶのはふさわしく  
なかったことが、本発掘によって明らかにされたのである。

その点からは前方の谷もすてに人間の生息するところには、海の浸  
入していたところとならず、むしろ貧弱ながら水田として成立し今

日に至る地相が展開していたと見てよいはずである。

弥生文化は前期から中期にかけて爆発的に拡散したが、かようなわずかな土地をも見逃がさず占居利用したことは、知多の歴史を語る上に注目されてよい。

以後引続いて住まわれたことになるが、特に鎌倉ごろまでの瓦の発見が注意される。

平安ごろのものについては、あるいはのちに都に出て融通念仏の開祖となった良忍の俗縁の一族のものかもしれないが、一方別に、尾張中島郡（現在一宮市）妙興寺文書によると同寺領の大半は、知多郡の荒尾宗順を始めとする一族歴代の寄進するところであったことが知られるが、その荒尾氏は本町内名和の南方に荒尾の地名が残って、付近一帯がその本貫であったことを示している。

そうしてみるとこれら瓦の出土は当然鎌倉前後に栄えた荒尾氏にかかわるものとして見なければならぬのは当然なところである。荒尾氏建立の寺がこのあたりにあったのであろう。上野町の中世史を語るのに確実有力な資料が一つふえたわけであることは喜んでよからう。

さらに想像を加えれば、このあたりの集落がのちに今日の名和の集落となるその前身であったかもしれない。

そうしてみるとここに最後に堆積した貝塚は、それらの住民たちがむしろ交易の結果得たものの残滓と見なければなるまい。このあたりに魚貝をひさぐ商賈がいたかどうかは決定できぬにしても、み

ずから海浜に出でずなどりを業とした者が住んでいたわけではあるまいと考える方がより自然なように思われる。

それは近世低地を通る街道が整備せられる江戸直前のことであろう。江戸時代に入って街道が整備せられると、集落はその周辺に移り住むようになり、かつては寺のあった故地の出緒が思い出されて、ここに八幡社を勧請したのではあるまいか。寛文村々覚書にも村四九ヶ所の社の筆頭に記されているのはその故であろう。

将来編纂されるであろう上野町史のための資料の一つとして、新しい分野の開けて来たことを、同町のために喜ぶものである。



← 名和八幡社  
遺跡全景

背後丘陵上より →  
神社（中央の森）を  
見る



← 発掘状況



内耳鍋出土状態 →

内耳鍋

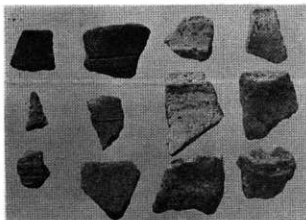
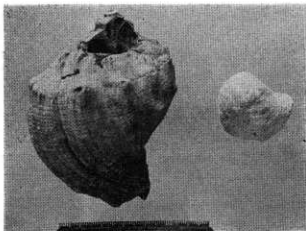


← 第1トレンチ層序

第2トレンチ層序 →



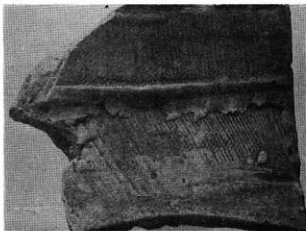
アカニシ (左) →  
カキ (右)  
(尺度は7 cm)



←

左上 縄文晩期? 甕  
左中 石鉢  
左下 縄文晩期か弥生中期の甕  
左二列目  
上 弥生中期の壺  
中 " "  
下 弥生後期の "  
左三列目  
上 弥生無類壺  
中 " 壺  
下 " 壺  
右上 弥生後期高坏  
右中 " "  
右下 " 器台

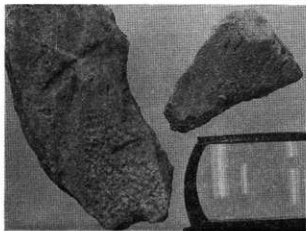
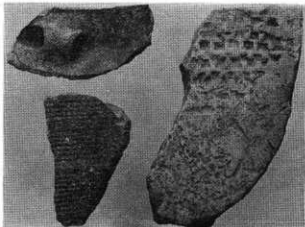
平瓦 (布目ある面) →





← 平瓦  
(叩目のある面)

→  
内耳鍋 左上  
縄目平瓦(左下)  
格子目平瓦(右)



← 同上平瓦  
(布目ある面)

